The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>山内陸平著『20世紀の椅子たち』椅子をめぐる近代デザイン史
Author(s)	木谷, 庸二
Citation	デザイン理論. 2014, 64, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56296
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山内陸平著
『20世紀の椅子たち』椅子をめぐる近代デザイン史
彰国社　2013年

木谷庸二／京都工芸繊維大学

「20世紀は椅子の世紀であった」と本書は始まる。

椅子というただ座るための道具が，これほどまでに発展した時代はこれまでなかったという。確かに，近代からポストモダンを経て現在に至るまで，時節の世相を反映して，無数というほどの椅子がデザインされてきた。その中から，近代デザイン史上著者が重要と考える100脚の椅子を取り上げ，時系列にそれぞれの椅子について解説したものが本書であり，副題でもある椅子を通した近代デザイン史である。

著者は京都工芸繊維大学意匠工芸学科を卒業後，株式会社高島屋設計部に入社し数々の椅子をデザインしてきた経歴を持つ。高島屋在職中，1960年代にイリノイ工科大学に留学，ジョージ・ネルソン事務所にてハーマン・ミラーの仕事にも従事する。その後，京都工芸繊維大学にて教鞭をとり，定年退職後の現在でも現役デザイナーとして活動を続けている（最近作は近畿日本鉄道の特急車両「しまかぜ」）。

このように著者の経歴を事細かに述べたのは，本書が「歴史家」の視点ではなく，上記の経歴を持つ「デザイナー」の視点で書かれた特徴あるものだからである。1960年代のアメリカを直に体験し，モノづくりの難しさを熟知する著者ならではの視点（素材と工法に関わる製造技術からの視点など）が随所に見られる。例えば，オットー・ワーグナーの郵便貯金局のスツールを解説する項目では「……ふとしたことからこのスツールの角のアールがどう見ても小さすぎる，曲木で曲がるアールなのかという疑念を抱き，実測する機会を持った。結果は，約二〇ミリの厚みの木が三〇ミリのアールで曲げられており，思わず100年前の曲木の技術力に感嘆した。」とあり，実際に曲木のスツールをデザインした者でしか分かり得ない指摘がなされ，他にも同様の指摘が多く見られるのである。この書籍が単に椅子のデザイン史に留まらない所以である。

また，本書の構成にも著者ならではの特徴が現れている。本書は99の項目からなり，各項目は概説とエッセイの二部で構成される。概説では作者の略歴，テーマとした椅子の概要，関連する他の仕事，さらに選択した椅子の周辺事情が綿密に明らかにされ，一方エッセイでは，著者とその椅子との関係や個人的な体験談を綴り，ミッドセンチュリーのアメリカを体感した著者にしか知り得ない情報を織り交ぜることで，椅子への深い理解を助けている。このようなエッセイを可能にしているのは，取り上げた椅子全てに著者が何らかの接点を持ち，実体験をもとにしているからである。

本書のタイトルは『20世紀の椅子たち』であるが，例外的に18世紀末につくられたシェーカーの椅子，19世紀中頃につくられたトーネット（No. 14）の椅子を近代デザインの原点として取り上げ，そこから一気にロン・アラッドの『トムバック』まで語られる。歴史上重要な椅子はほぼ網羅されているが，オーレ・ヴァンシャーの肘掛け椅子やニールス・O・ムラーの小椅子，イエンス・ニールセンのラミネックス等々，他では取り上げら

れることのない椅子にも光を当て，椅子の「辞書」としての役割も本書は果たしている。

また，可能な限り作者への聞き取り・情報収集を行い，本邦初となる図版も多数収録されていることも，本書を特徴づけるものである。

そして一貫して本書で確認できるのは，デザインマネジメントの視点である。その背景には，著者も文中に記している通り，1960年代のジョージ・ネルソン事務所での体験がある。ジョージ・ネルソンはデザイナーというよりもディレクターであり「構想デザイナー」であったと記されているが，デザインマネジメントという言葉が無かった時代に，既に現在のデザインマネジメントを実践していたジョージ・ネルソン事務所での体験が，本書での椅子の捉え方に強く影響を与えている。特にトーネットのNo.14とイームズのアルミナム・グループを椅子のデザイン史上でのエポックと捉える理由について，著者は以下のように言う。量産という概念のもと，前者はパーツのアッセンブリーからなる製品をノックダウン手法で国外へのビジネスに繋げたことがそれまでになかったことであり，後者はパーツのカスタマイズという手法により在庫を抱えず複数の顧客のニーズに対応するシステムを初めて構築したことである，と。二脚の椅子は椅子のデザイン史上有名なことは周知の通りであり，度々取り上げられ語られる椅子であるが，上記のような捉え方で語られる事はなく，新たな視点（デザインマネジメントの視点）を本書では提供している。従来とは一線を画すこのような見方は，他の椅子に対しても為されており，その結果，本書を通して「椅子」の奥深さに改めて気付くこととなる。その他，新たな素材の発現と製造技術の発展が，如何に椅子のデザインに影響を与えているかを確認できることも，本書の魅力である。

本書は大阪府家具連合会が発行する機関誌『家具タイムズ』に９年余りにわたって連載された『私が出会った100脚の椅子』を加筆・補正して纏められたものである。著者の椅子に対する並々ならぬ思いや作者への敬意が込められた，デザイン実務者の体験的「椅子物語」としても読むことが出来るものとなっている。